

第三十九回 歯と脳の病気との関係

顎関節症をおこしますと頭蓋骨がズレ、その周りの筋肉も緊張するものです。特に胸鎖乳突筋は耳の後ろあたりの頭蓋骨の横から首の横斜め前方に向かって胸の鎖骨迄伸びています。

又僧帽筋(そうぼうきん)は頭の後ろの後頭骨から首の後ろを通して左右の肩そして背中の上側1/3位迄の菱形した筋肉です。

これらの筋肉を支配しているのが脳神経の11番の副神経です。

この副神経の支配領域に異常をおこしますと脳の病気の原因の1つといわれています。

これらは歯の噛み合わせの高低により頭蓋骨の捻れをおこしさらに筋肉に緊張をおこし、大脳に大きな影響を及ぼしているものです。

歯の噛み合わせの低いところ又は全くあたらなところのその位置の関係する大脳に虚血現象をおこし、(頭蓋骨のその位置の骨にもくぼみがおこる)頭痛がおこりやすくなります。

逆に咬み合せの高いところに脳内の圧が高まり、その位置と関係する頭頂骨も膨らむものです。このように脳内の血管が弱くなるといろいろな病気を誘発しやすくなるものです。

頭頂骨に「くぼみ」「膨らみ」がありますとその位置と関係する大脳をとおして関係する内臓にも異常反応をおこすものです。

そして頭蓋骨の左右が前後にズレを起こすのは左右の歯の高さが違っている事を意味しています。その他口の中の上顎の左右の奥の歯の「ドテ」が上下にズレをおこすこともあります。足の裏の痛み、足のかかところが痛い(原因は反対側の前寄りの歯が高い)、又、足の裏の真中の土踏まずが痛い(原因は反対側の前歯でもなし奥歯でもなし真中が高い)、足のつま先が痛い(原因は反対側の奥歯が高い)

足の親指の外反母趾は足のつけ根の関節と関節のすき間が圧迫され骨が飛び出す。(原因は奥歯の低い側におこる)

逆に反対側の足の小指は関節と関節のスキ間が広いものです。(奥歯の咬み合せの高い側におこる)

足の親指の外反母趾ならば同側の手の親指も同じで、指のつけ根の関節と関節のスキ間が狭くなっています。反対側の手の小指はその逆で関節のスキ間が広がっています。

肩が凝るのはその側の奥歯が高いことです。その反対側に頸椎ヘルニア(首の頸椎ヘルニアと腰の腰椎ヘルニアは対角線上に逆になる)がおこしやすく、足のヒザの痛みも歯の高低によりヒザの脛骨が前後するものです。

又おしりの骨盤(真中の仙骨とその両側に左右別々の腸骨の3つの骨からなりたっています。)
この仙骨の左右のスキ間の上側に仙腸関節(左右の歯の噛み合せの高さの違いによりぎっくり腰となる)、下側にブーツ部がありますがこのスキ間が歯の噛み合せの左右前後の高さの違いの原因により骨盤から足先迄の血流障害をおこし足が冷えるだけでなくあお向けで寝ると腰が痛いとか、第二の心臓と言われる「ふくらはぎ」が酸素欠乏により「足がつる」とか「こむらがえり」をおこしたりするだけでなくこれが原因で全身の血流にも影響を及ぼすものです。

又顎関節の関節円板が異常をおこしている側の反対側の足のつけ根の股関節に異常又は痛みをおこしたりするだけでなくその側の腰から足先迄の血流障害をおこし、筋肉痛とか関節痛をおこすものです。頭蓋骨の左右が前後にズレをおこしていますと、後ろへズレをおこしている側(奥歯の歯の噛み合せが低い為)の頭蓋骨の片側半分及び首、胴体部(内臓を含む)の片側半分は血行障害をおこすものです。

そして関節円板の異常又はズレをおこしている側の歯を治すことにより、その側の噛み合せの高さが低くなり、スキ間が出来ることになります。

奥歯の噛み合せの高さが低い側に鼻づまりまたヒジに異常をきたし、反対側の足のヒザにも異常をきたしたりするものです。

頭蓋骨調整をやり顎関節症を治すために関節円板を正常な位置にもどしますと必ずその側の上下の奥歯の歯にスキ間が出てくる事になります。

若い時は骨がズレをおこしても周囲の筋肉で支えています但し老人になると筋肉も弱くなり杖が必要となります。杖を持っている反対側が顎関節円板のズレている側でその側の歯が低いという事になります。

歯の噛み合せの調節も歯を診て歯の噛み合わせの調節だけならば・・・。

顎関節症を治して噛み合せの調節の反応を見るのは大脳です。

大脳の反応を読み、体の骨格の異常を読み取りながら上下の歯に紙を咬ませてそれを読み調節するものです。

歯に咬合紙の色がほとんどついていないのに大脳だけ反応するときにはもう一度よく歯を見ることです。針の先の細い点だけが強くあたっているのかも知れません。

そこを削除策をやり調整を終わり足踏みさせるとバランスがとれているとか体が軽いと患者が言う
ものです(全身の血流がよくなる)